

「自己」の感覚はいかにして生ずるか？

—自己感をめぐる心理学的研究の概観と展望—

松岡 利規

1. はじめに：見出された自己感

心理学の分野において、「自己」の問題ほど繰り返し議論され、そして曖昧さを孕んでいる領域もないだろう。James (1890) が 19 世紀末に自己を「主我 (I)」(=知るものとしての自己) と「客我 (Me)」(=知られるものとしての自己) とに区別して以来、さまざまな角度から自己概念の諸側面について研究が試みられており、その成果は枚挙にいとまがない。こうした自己に関する議論の多くは、「客我」、すなわち「対象化された自己の意識」を問題としており、自己成立の条件として言語獲得以降における反省的意識の存在を措定している点が共通しているだろう。ここで、自己のもつ「主我」的な側面に積極的にアプローチする方法はないのだろうかという疑問が生ずるのは至極真つ当なことかもしれない。あるいは、これは「言語的・反省的な意識以前の段階における自己の問題を考えることはできないだろうか」と換言できる。言語獲得以前の段階において「自己にまつわる本来の何か」は存在していないのだろうか。

米国の精神科医であり精神分析家でもあった Stern, D. は、この問題に正面から取り組み、理論的な体系化を試みたことで有名である。こうした彼の研究の成果は、“*The Interpersonal World of the Infant: A View From Psychoanalysis and Developmental Psychology*” (Stern, 1985) として上梓されているが、そこでは確固たる概念として成立した自己ではなく、自己にまつわる何かしらの感覚、つまり「**自己感** the sense of self」をキーワードに考察が行われている。ここで、この問題の探究のために Stern が用いた手法は、当時としては画期的なものだった。すなわち、それまで交わることなく別個に発展を遂げてきた「**被観察乳児** observed infant」(発達心理学の研究において乳幼児の行動観察から見出された知見) と「**臨床乳児** clinical infant」(精神分析の発達理論に基づき遡及的に導出された知見) の統合を図り、発見的に自己感の理論を構築したのである。こうした実証的アプローチは既存の臨床心理学理論に説得力を与えるものでもあり、心理学研究においてエビデンス・ベーストな知見が求められる現況に鑑みてもなお新鮮さを失っていない。一方で、Stern 以降はそれ以上の理論的統合が試みられておらず、被観察乳児と臨床乳児の出会いはいくらも果たされていないのが実情である。しかし、自己感にまつわる探究は心理学のさまざまな領域で依然盛んに行われている。本論では、Stern の理論を基軸にして、この自己感研究の成果について概観し、改めてその現代的意義について考察したい。

2. Stern, D.の功績

自己感の問題を紐解くにあたって、まずはSternの唱えた自己感理論について振り返りたい。Stern (1985) は、1970年代以降の乳幼児発達心理学諸研究の知見を視野に入れながら、誕生直後から言語の出現辺りまでの乳幼児の自己感の発達を論じている。彼は以下のように述べている。「我々は成人として、日常の社会体験に浸透した、まさに実感としての自己感を持っている。それは様々な形をとって現れるが、まず、単一で、他から区別された、統合された肉体であるという自己感がある。そして、行為を行うこと、感情を体験すること、意図を決定すること、計画を立てること、体験を言語に転換すること、自分の知識を伝えたり共有したりすることといった、これらすべての主体としての自己感もある。これらの自己感は呼吸と同じで、大抵の場合意識の外にあるが、時にそれが意識に上り、そこに留まることもある」(Stern, 1985)。そしてSternは、人には日常的な体験を主観的に組織化 organization し加工処理する作用が備わっており、こうした組織化の主体こそが自己感であると定義する。つまり、自己感は、組織化によって生じる感覚であると同時に組織化の主体でもあり、ゆえにその創出のプロセスは常にダイナミックなものであると言えるだろう。Stern (1985) では、「**新生自己感** sense of an emergent self」「**中核自己感** sense of a core self」「**主観的自己感** sense of a subjective self」「**言語自己感** sense of a verbal self」という自己感の4領域が最早期より漸次的に創出される中で、総体的な自己感が立ち上がるというモデルが考えられており、それぞれの自己感は相互に作用しつつも一生涯作動し続けると想定されている(図1)。

新生児は一見生理的なニードに突き動かされているだけのようだが、実は想像以上に多くの能力を持ち、既に様々な形で世界を体験し始めている。生後2ヶ月までの間に生じるこうした萌芽的な感覚が、新生自己感である。この段階の乳児には、一貫した自己の感覚はまだ備わっていない。だが、乳児はあらゆる生理的な感覚と刺激の弁別能力を駆使し、世界で起こる出来

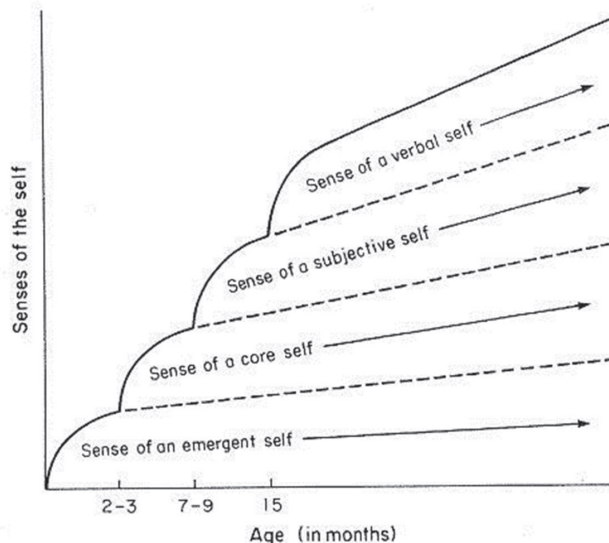


図1 自己感の発達モデル[1985年版] (Stern, 1985)

事を急速に分類し、体験の組織化は既に始まっていると考えられる。

続いて生後 2-6 ヶ月には、単一で一貫した身体単位としての自己の感覚である中核自己感が出現する。ここにきて乳児は、他者（母親）と自分は別個の存在であることを理解すると同時に、自分が他者と「共にあること being-with」も学ぶ。この領域においては、他者からの関わりを受けて自己の身体が感知する「自己-発動性 self-agency（自分の行為を発動しているのはこの自分であるという感覚）」、「自己-一貫性 self-coherence（自分の行為にはまとまりがあり、断片化されていないという感覚）」、「自己-情動性 self-affectivity（自分の内部にあるものとして、いくつかの典型的情動を体験すること）」、「自己-歴史 self-history（自分の過去とのあいだに連続性があるという感覚）」といった、4つの自己不変要素が重要な柱とされている。

生後 7-9 ヶ月になると、乳児は行動の背後にあってその行動を起こす精神状態（感情、動機、意図など）がわかり、自分自身だけでなく、他者にも心があることを知る。これが主観的自己感の始まりである。他者との間において精神状態を読んだり、調和したり、提携したり、波長が合ったり（あるいはそれぞれにおいて失敗したり）ということが可能になり、乳児と親との間には間主観性 intersubjectivity の領域が成立するようになる。

生後 2 年目に差し掛かり言語が獲得されるに伴って、言語自己感の形成が始まる。乳児は、自己を客観視する自己反映 self-reflective 能力を手に入れ、象徴の使用や願望を抱くことなどが可能になる。これに伴い、乳児の総括的体験はその一断片のみが言語化され、その他の部分は潜行していく¹。一方、言語の獲得により、他者と意味を共有、伝達できるようになり、乳児は「他者と共にあること」の新しい方法を獲得する。

こうした Stern の理論の特徴について、神庭・神庭（1989）は「自己感を一時的なものとみなさず、それ自体を心的発達のオーガナイザーとみなしていること」「従来の精神分析発達モデルへの批判」「乳児は従来考えられていたよりも優れた現実検討の能力をもつという認識の提供」「自己/他者未分化状態の否定」の 4 点を挙げている。ここからも分かるように、Stern の理論は既存の精神分析的理論を実証的な見地から痛烈に批判するものでもあった。例えば、4 つの自己感のひとつが出現すると一生涯にわたって休むことなく活動し続けることから、ある時期に特異的とされていた臨床問題も、一生涯どの時期でも起こり得ることになり、発達上の「固着」が神経症の発症に繋がるという古典的精神分析のアイデアには疑問が投げかけられることとなった。また、乳児における自己/他者の主観的一体感が、「他者と共にある自己」という健康な統合が果たされた状態として位置づけられたことは、発達早期に自己/他者の妄想的な融和状態を想定する従来の見解（e.g. Mahler, 1975/1981）と対立するものである。

金川（2005）は、Stern の 4 つの自己感のうち、新生自己感・中核自己感・主観的自己感の 3 つは、「他者とのかかわりの瞬間瞬間に経験される、主観的経験にもとづくもの」とし、一方言語自己感「客観的・概念的自己の到来を示したもの」としている。先程の James（1890）を参照すると、前者 3 つが「主我」の領域に、後者が「客我」に、それぞれ属するものと位置づけられよう。Stern のいう組織化の作用は、一人の人間の中における主我と客我をまとめあげ、

¹ Stern（1985）は、言語以前/言語以降の 2 つの体験間にずれが無意識を生み、神経症発症の素地となると考えている。

全体としての自己の感覚をもたらすものと言えるだろう。

その後、Stern は 2000 年に出版された“*The Interpersonal World of the Infant*” ペーパーバック版序文 (Stern, 2000) において、自己感モデルの修正を試みている (図 2)。そこでは、まず、新生自己感と中核自己感がともに生後すぐから存在していると改められている。また、その後のミラーニューロン研究の展開などから、間主観性の原型となるものは生後間もなくから備わっていると推測し、「他者とともにいる中核自己感 the sense of core self-with-another」が新たに想定されている。間主観性についても、「自己を調整する他者」に加えて、ミラーニューロンシステムに関わる「自己と共鳴する他者 self-resonating-with-another」の存在が重要ではないかということで、主観的自己感は「間主観的自己感 the sense of an intersubjective self」と表現が改められている (Stern, 2000)。つまりこのモデルでは、人は生まれながらにして関係性の中に埋め込まれた存在であるという点が強調され、間主観的世界と自己感がともに発展していくとみなされるようになったわけである²。この他、1985 年版では積極的には論じられていなかった言語

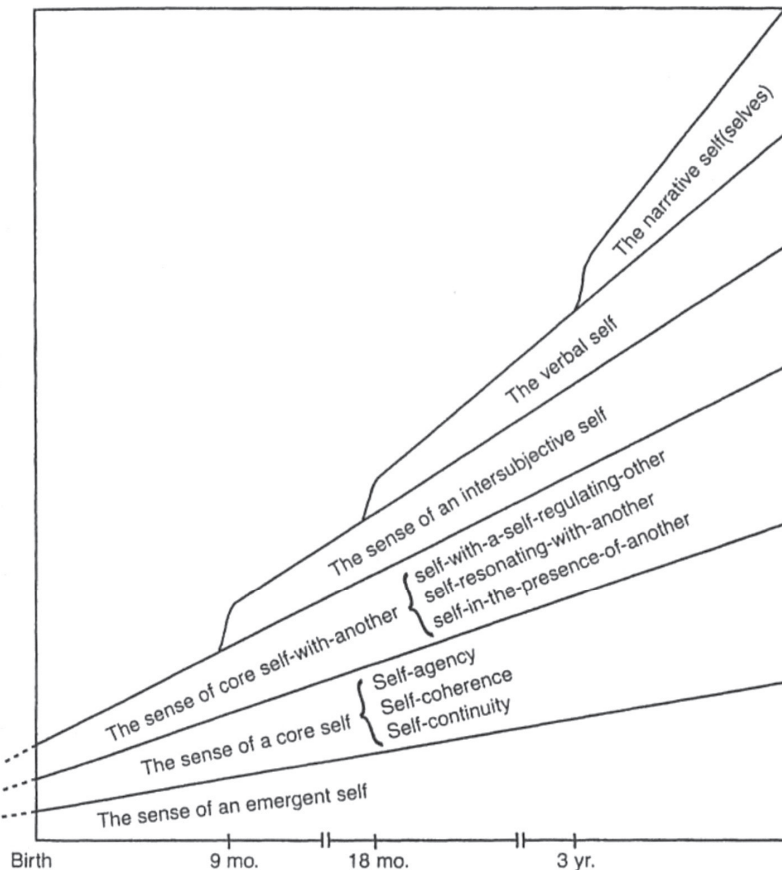


図 2 自己感の発達モデル[2000 年版] (Stern, 1985)

² この点について石谷 (2007) は、1985 年版では否定した、発達再早期での自他未分化で融合しているとされる心の理解を、異なる文脈から再評価したものではないかと指摘する。

自己感以降の展開についてもこの序文では言及されている。新しいモデルでは、「象徴化や言語による自己/世界の表象」と「自分の体験を物語る能力」とが明確に区別されて論じられるようになり、前者が「言語自己感」、後者が「ナラティブ自己感 the narrative self (selves)」として、再編されることとなった。ここで新たに登場した「ナラティブ自己感」は、それまでの自己感を材料にしながら修正・精緻化されていくものであり、こうしたナラティブこそが臨床における主体であり器になると考えられている (Stern, 2000)。

さて、2000 年の修正以降、自己感創出過程の一部と関連のある論考はあるものの (e.g. Stern, 2010)、この自己感モデル自体の更新は試みられないまま、Stern は 2012 年に世を去ることとなった。しかし、自己の感覚にまつわる心理学的探究は絶え間なく続いている。では、そうした知見をここで改めて Stern の理論のもとに収斂させた場合、どのような像を結ぶだろうか。以下では、Stern の辿った思考過程に倣い、被観察乳児・臨床乳児それぞれについて、その後の展開を追いたい。

3. 被観察乳児のその後：認知・発達心理学の分野における発展

先に、Stern の自己感の理論は、James の呼ぶところの「主我」に直接アプローチを試みる理論だとした。2000 年代に入ると、認知神経科学の分野においてもこの「主我」への理論的接近が積極的に試みられるようになる。Gallagher (2000) は、自己の問題をミニマル・セルフ minimal self とナラティブ・セルフ narrative self に分けて考えることを提案しているが、このミニマル・セルフは「主我」へのアプローチを可能たらしめるものだと考えられる。Gallagher は、「自己の非本質的な特徴を全て取り去ったとしても、基本的で、即時的、原始的な、自己と呼びたくなるような何かが尚ほ残る」とした上で、時間的延長を持たず、直接的で、前反省的・非概念的なこの「何か」こそが、ミニマル・セルフだと述べている³。このミニマル・セルフは、身体保持感 sense of ownership と自己主体感 sense of agency から成り立つと考えられ、前者は「経験を受けているのは自分だ (e.g. この手は自分の手だ)」という感覚、後者は「行為を引き起こしているのは自分だ (e.g. この手を動かしているのは自分だ)」という感覚である。特にこの自己主体感については、自己の根源的な領域、ひいては自己感の発生の問題を考える上で非常に重要なキーワードとして昨今は考えられている。

自己主体感を理解する上では、Wolpert (1997) の計算論モデルが役に立つ。脳は、運動の制御と学習のために、自分の身体と外界との相互関係を表象する 2 つの内的モデルを持っていると考えられる。このうち、順モデル forward model は、原因から結果を予測するモデルであり、逆モデル inverse model は、観測・決定した結果から、それを実現するに至った原因を推定するモデルである。このうち順モデルにおいては、運動が実行された場合の身体感覚の予測も行い、現実の身体感覚との照合が行われる⁴。両者がある程度一致する場合、「その行為は自分によってなされたものだ」として自己主体感が経験される。佐藤 (2011) は、こうした自己主体

³ 一方ナラティブ・セルフは、過去の記憶や未来志向的な意図を含んだ、時間的に拡張された自己の感覚とされている (Gallagher, 2000)。

⁴ 対して逆モデルは、ある行為を実行しようとする場合、必要な運動指令を作成する。この運動の司令が身体に送られることで筋収縮による実際の運動が生ずるが、それと同時に運動指令の遠心性コピー efference copy が作成され、順モデルにより身体の運動の結果が推定される。

感の根本に、自己の自己たる感覚を根底から支えている感覚が存在するのではないかと指摘する。すなわち、遠心性情報と求心性情報が一致しない場合であってさえ、人はその行為を「自己特有のパースペクティブ」から知覚しているわけである。Legrand & Ruby (2009) は、知覚対象を知覚主体に結びつけるこうした「パースペクティブ」にこそ自己特有の特徴があると述べている。自己は常に自己特有のパースペクティブから世界を経験しており、そのおかげで、私の知覚や表象や経験は、他の誰でもない「私の」知覚や表象や経験となっているわけである。Stern の理論においては、人に本来的に備わっている組織化の作用が自己感の先駆体であり主体として想定されているが、まさにこの組織化こそが、自己特有のパースペクティブといえるかもしれない。

乳幼児研究においても、自己感の構成要素の一つとして自己主体感への注目が高まっている。Synofzik et al. (2008) によると、自己主体感は感覚運動レベルと推論レベルの2段階によって構成されると考えられる。新生児が有しているのは、自己受容感覚の予測機構に基づく感覚運動レベルの自己主体感である。このことは、Stern が中核自己感の発生を出生直後と修正したこととも一致する見解だろう。その後、乳児は生後8ヶ月頃に、自己の運動に伴う感覚フィードバックの時間的整合性が損なわれた状況に対して注意を向けたり、探索行動を示すようになり、推論レベルでの自己主体感が成立するようになる。こうした乳児の自己主体感について、田中 (2016) は発達モデルを用いて考察している。そこでは、8ヶ月ごろまでに獲得される運動主体感が、自己と他者は異なる主観を持つ存在であるという認識の萌芽を促す可能性があり、第二次間主観性（自己とは異なる主観性を持った他者との主観性の共有）の先駆けとなる認知的メカニズムではないかとの指摘がなされている（田中, 2016）。この指摘は、中核的な自己感がその後の自己感の間主観的な領域の発達を促すオーガナイザーとなるという点において、Stern の仮説とオーバーラップするものだろう。また大藪 (2016) も、反省的意識が成立する以前のより最早期の自己感覚に着目している。そこでは、「認知モデル」（高次な表象能力の出現が、注意対象としての自己や行動主体としての他者への気づきに不可欠だとみなす）と「情動モデル」（乳児は自他の情動共鳴的な関係を基盤にして自分の情動に気づき、自分のように感じられる他者の情動にも気づいていく）の2つが乳幼児において自己感が発生する前提であるといい、この2つのモデルがダイナミックに関係しあっていると述べられている。

以上を概観すると、被観察乳児の立場においては、自己主体感を切り口に、言語以前のより本来的な自己の感覚への注目が高まっていることが分かる。特に、自己感の発生するための要件としては、自己特有のパースペクティブである「組織化」が作用することと、他者との情緒的関わり合いの領域としての「間主観性の成立」が特に重要であると言えるかもしれない。

4. 臨床乳児のその後：臨床心理学の分野における発展

Stern の理論が世に問われて以来、臨床心理学の分野では事例研究を通じて繰り返し自己感について考察されてきた。自己感理論は乳幼児期の発達を手がかりに見出されたものであることから、そこでの知見が直接子どものセラピーの理解に役立てられている例も少なくない。例えば、森 (1996) や Mori (2001) は、中核自己感の領域に障害を抱えた自閉症の子どものプレイセラピーについて報告がなされている。そこでは、セラピストとの治療的関わりの中で子ども

が中核自己感を回復し、主観的自己感の領域へと押し出されるプロセスが鮮明に描写されている。更に、森（1998）では、言語自己感の領域での象徴的なやりとりを通じて、自閉症を持つ子どもが確かな自己を手に入れていく治療過程が描かれている。また、山崎（2015）は、養育者との身体的なつながりを欠いた状態にある自閉症の子どもが行う「泣く」「噛み付く」「走る」などの行為に注目し、そうした動きの中に『自らなす』自己感という、原初的な自己感を見出している。そして、『自らなす』しかなかった自己感が、『行為の主体としての』自己感へと立ち上がっていくことが重要なのではないかと指摘する。この他、自閉症のような先天性の発達の問題だけでなく、虐待などによってもたらされた愛着不全により、二次的に自己感の発達が阻害されることも報告されている（奥山，2006）。

こうした子どもの発達の問題から進んで、Stern の自己感理論は、成人のセラピーへの応用も積極的に試みられている（森，2009）。特に、Stern と共に乳幼児-母親関係の観察・研究を積み重ねてきた Beebe, B. は、そこから得た知見を大人の精神療法に見事に活かしている（Beebe, et al., 2005/2008）。また、Stern らを中心に組織された精神療法の研究グループである Boston Change Process Study Group (BCPSG) は、乳幼児観察にヒントを得て、成人の面接過程をマイクロ分析という手法で分析し、身体感覚や非言語コミュニケーションといった「暗黙の知識 implicit knowing」が自己感の変容に寄与していることを実証している（BCPSG, 2010/2011）。本邦では、例えば大野（1995）が、面接における非言語的な情緒交流を通して自己感が発達する過程を捉えている。また、林（2008）は、アスペルガー症候群の成人男性との心理療法において、情動刺激に対する閾値が調整されクライアントの自己発達が促進されていくプロセスを通じて、自己感の発達不全がアスペルガー症候群の特質のみによるものではなく、生育過程の中で経験してきた情動的枠組みの影響を受けているのではないかと指摘している。この他、藤本（2013）は面接の中で激怒を繰り返す女子学生との治療経過を、自己感の発達というラインに従って考察している。こうした報告は、面接内において生じる前言語的な情緒交流を治療のファクターとして実践に導入している点が特徴的であり、従来積極的に記述されてこなかった非言語的な治療因について考察可能になった意味で意義深いと言えるだろう。さらに、こうした先行研究は、成人の言語面接であっても、乳児期より立ち上がる自己感の未発達な領域にアクセスし、その再編が可能であることを示唆するものである。

この他、臨床の現場における身体性の問題を議論する上でも、自己感の概念が役に立つ場合も多い。例えば前川（2011）は、術後せん妄の事例において、身体的記憶が現在の自己感と繋がっていない状態像について考察している。そこでは、他者と（メタファとして）「目が合う」体験がきっかけとなり、バラバラになっていた身体的自己感がまとめ上げられたと述べられており、身体的自己感の安定においても他者の存在が重要であることが指摘されている。また、小笠原・増田（2016）は、特別支援教育における身体表現活動が、子どもたちの自己感の成長を促すとしている。加えて松井（2006）は、乳幼児の日常的なエピソードの観察から、自己感の成立には、Stern が重視した遠受容感覚（視覚や聴覚など）だけでなく、自己身体における自己受容感覚や近受容感覚の領域における間主観的な体験も重要であることを指摘している。

以上を概観すると、治療の中で登場する言語化できない対象、あるいは言語以前の領域にアクセスする上で、自己感の理論は特に援用されてきたと見ることができよう。非言語的な領域

や身体感覚なども、言語象徴化可能な領域まで通ずる一つの発達ライン上に布置できる点は、自己感理論の持つ強みであると言えるかもしれない。

5. 非定型な自己感：統合失調症と発達障害

自己感は普段意識の外にあると言われており、健常な成人がそれを日常的に意識する機会は少ないと考えられる。そのため、自己感はその作動が障害された時にはじめて観察可能になると思われる。自己感はひどく障害されたとしたら、正常な社会的機能を妨害し、精神の異常をきたし、重篤な社会的欠陥を引き起こしかねないだろう。Stern (1985) は、自己感のそれぞれの感覚が障害された場合に生じる症状について、以下のように想定している。

発動の感覚：麻痺、自分の行動なのに自分がしていると思えない感じ

身体的融和の感覚：肉体的な体験の断片化、離人感、体外体験、現実感の喪失

連続性の感覚の障害：一時的解離、朦朧状態、健忘

情動の感覚：アンヘドニアや解離状態

他者との間に間主観性を確立できる主観的自己の感覚：途方もない寂寥感や、精神が見透かされているような感じ

オーガナイゼーションを創造しているという感覚：精神的大混乱

意味を伝達しているという感覚：文明からの排除、交際の欠如

こうした記述からも分かるように、自己感の理論というのは、いわゆる「定型的な発達」のアウトラインを提示するだけでなく、種々の臨床問題を考える指針としても多に役立つものである。例えば、Zhao ら (2013) は認知神経科学の手法を用いて種々の精神疾患と非定型な自己感との関連を探っている。その結果、特に統合失調症と自閉症において、ミラーニューロンシステムと脳の半球間結合に異常が見られ、自己主体感や身体的自己に障害が生じていると報告している。以下では、これら2つの状態像における非定型な自己感の様相について見ていきたい。

Stern (1985) は、中核自己感における自己不変要素の障害が重篤な精神病においては見られるとしているが、統合失調症はこれに当てはまる例だと考えられるだろう。統合失調症者の自己感に対する最初のアプローチとしては、Frith (1987) の研究が挙げられる。彼は、統合失調症の病理について認知神経科学の観点からアプローチし、「自己モニタリング仮説」によって陽性症状を説明しようと試みた。私たちには自身の行為をモニタリングする機能が備わっており、幻聴、思考吹入や作為体験といった異常な体験は、この機能が障害されたために生じると考えたわけである。その後、この自己モニタリング仮説は、先の Wolpert の計算論モデルなどによって裏付けられ、自己主体感や遠心性コピーの問題として考えられるようになっていく(前田, 2016)。更に、Asai & Tanno (2007, 2008) は、健常者における統合失調型パーソナリティの傾向が高い人でも自己主体感の異常傾向が見られることを確認し、浅井ら (2009) は自己主体感尺度の作成を通じて、健常者の中でも自己主体感の程度には個人差が存在することを見出している。先に指摘したように、自己主体感は自己感が成立する上での最も基礎的な要件の一つであると考えられるため、これらの研究はひいては自己感にも定型から非定型へとつながるスペクトラムが存在していることを示唆するものだろう。実際、松岡 (2015) は、自己感の統合度

を測定する尺度を健常大学生に実施し、統合度の面において自己感の体験には大きな個人差があることを見出している。

こうした精神病だけでなく、発達障害についても、Stern が理論を唱えた当初から自己感の不全との関連性が想定されていた (Stern, 1985)。実際、前節でも見てきたとおり、発達障害者の自己感の問題に関する臨床現場からの報告は盛んになされている。広沢 (2010) は、精神科医の立場から、発達障害者は PDD (Pervasive Developmental Disorder) 型自己という特異な自己感を持っているのではないかと述べている。この PDD 型自己においては、自己を中心に世界を統合する作用 (Stern の言う“組織化”) が弱く、世界はあたかも“格子状”の配列として経験されると考えられている。更に、自閉症スペクトラム児者における特異な機能連関が自己感の持ちにくさと結びつくことで、自己感を実感したいという発達欲求を生み出すという独自の発達連関を形成する可能性も指摘されている (別府, 2014)。ASD の子どもを持つ親の語りからも、ASD 児の受身的なあり方の背後には自己感の問題があり、自分の動機に基づいて行動し達成感を得るといった感覚が弱いのではないかと考えられている (松本, 2015)。こうした自己感の弱さについては、実際に発達障害者自身も語るところとなっている。佐藤・櫻井 (2010) は、自閉症者の伝記の分析から当事者における特異的な困難の同定を試みている。そこでは、自閉症者においては境界と統合の弱い自己感が基盤となっているため、対人関係の中で自己感や自己理解を得ようとすればするほど、自己喪失の危機につながってしまい、他者との関係の中で自己認知を深めていくことが困難であることが明らかにされている。綾屋・熊谷 (2008) や綾屋 (2011) も、当事者研究の立場から発達障害者の自己感の弱さについて報告している。

また、認知神経科学の分野においても、発達障害者の自己感の脆弱性の問題が指摘されている (e.g. Cheng et al., 2015)。先の Zhao ら (2013) によると、ASD 者においても、統合失調症者同様に、自己主体感や身体的自己の障害が見られる。一方、ASD 者の場合は、成長に従って脳部位の結合異常を補償するように神経ネットワークが変化すると考えられている。こうした補償作用のために、統合失調症者ほど ASD 者の自己の問題は重症化せず、むしろ (特に高機能群においては) 加齢とともに軽症化していくのではないかと考察されている (Zhao et al., 2015)。Lyons & Fitzgerald (2013) は、近年の認知神経科学における ASD 研究の成果から見出された非定型な自己感の状態像について、自己主体感や時間的拡張自己、マインド・リーディングやナラティブの能力といった様々な切り口から幅広くレビューしている。そこでは、ASD 者の自己感が、連続性の感覚や身体イメージが不確かであったり、他者との感情的関わりが弱かったり、自己を物語る能力に乏しかったりという形で障害されていることが述べられている。

6. おわりに：自己感理論の今後に向けて

さて、本稿を閉じる前に、自己感の問題のもつ現代的意義について少しだけ考えてみたい。近年は自分の内面を語れず葛藤しない若者が多く存在すると指摘され、こうした既存の心理学体系では捉えきれないような病像の背景には、パーソナリティ構造の時代的变化があるのではないかと推測されている (e.g. 高石, 2009 ; 川上, 2013)。広沢 (2015) はこうした若者の問題について、彼らの多くが自己の統合指向性を十分に育めないまま青年期を迎えており、確固たる固有の自己感を持てずにいるのではないかと、という視点を提供している。また大須賀 (2008)

も、今日のわが国の地域共同体や家庭環境においては、子どもの自己感の十全な形成が危ぶまれる状況にあるのではないかと危惧している。こうした指摘からは、従来に比べ現代は自己感が十分に育まれにくい時代であり、それによって臨床の現場に持ち込まれる問題も変化している可能性が考えられる。特に、広沢の言う「自己の統合指向性」を自己感の「組織化の作用」と読み替えると、現代的な心性の問題は自己感の創出というパラダイムそれ自体の非定型化として位置づけることが可能かもしれない。本論の限界を超えるため、詳細な議論はここでは控えるが、いずれにせよ、現代的な心性にまつわる種々の臨床問題を積極的に理解する上でも、自己感の理論は重要な手がかりを与えてくれそうである。

本論では、Stern の理論を下敷きにしつつ、被観察乳児・臨床乳児の立場から自己感の展開について辿ってきた。また、自己感の非定型な状態像として統合失調症と発達障害の2つを挙げ、その特異な体験についても概観した。Stern 以後、被観察乳児、臨床乳児はそれぞれの発展を遂げてきたが、Stern の理論は今なおそのどちらとも接点を持ち続けており、現代的な臨床問題を考える上でも有益な示唆を与え続けてくれるものだろう。

7. 参考文献

- Asai, T., & Tanno, Y. (2007). The relationship between the sense of self-agency and schizotypal personality traits. *Journal of Motor Behavior*, **39**, 162-168.
- Asai, T., & Tanno, Y. (2008). Highly schizotypal students have a weaker sense of self-agency. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, **62**, 115-119.
- 浅井智久・高野慶輔・杉森絵里子・丹野義彦 (2009). 自己主体感を測定する尺度の開発と因子構造の探索. *心理学研究*, **80**, 414-421.
- 綾屋紗月 (2011). 総論 発達障害当事者から：あふれる刺激、ほどける私. 青木省三・村上伸治 (編). *成人期の広汎性発達障害*. 中山書店, pp.70-83.
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎 (2008). 発達障害当事者研究：ゆっくりていねいにつなごう. 医学書院.
- Beebe, B., Knoblauch, S., Rustin, J., & Sorter, S. (2005). *Forms of intersubjectivity in infant research and adult treatment*. New York: Other Press Inc. 丸田俊彦 (監訳) 貞安元・吾妻壮・濱田庸子・森さち子 (訳) (2008) 乳児研究から大人の精神療法へ：間主観性さまざま. 岩崎学術出版社.
- 別府哲 (2014). 自閉症スペクトラムの機能連関、発達連関による理解と支援：他者の心の理解に焦点をあてて. *障害者問題研究*, **42**, 91-99.
- Boston Change Process Study Group. (2010). *Change in Psychotherapy: A Unifying Paradigm*. New York: W. W. Norton & Company. 丸田俊彦 (訳) (2011). 解釈を超えて：サイコセラピーにおける治療的变化プロセス. 岩崎学術出版社.
- Cheng, Wei., Rolls, E. T., Gu, H., Zhang, J., & Feng, J. (2015). Autism: reduced connectivity between cortical areas involved in face expression, theory of mind, and the sense of self. *Brain*, **138**, 1382-1393.
- Frith, C. D. (1987). The positive and negative symptoms of schizophrenia reflect impairments in the perception and initiation of action. *Psychological Medicine*, **17**, 631-648.

- 藤本幸子 (2013). 「ブレ」に怒る女子学生との面接過程. 精神分析研究, **57**, 163-169.
- Gallagher, S. (2000). Philosophical conceptions of the self: implications for cognitive science. *Trends in cognitive psychology*, **4**, 14-21.
- 石谷真一 (2007). 自己と関係性の発達臨床心理学：乳幼児発達研究の知見を臨床に生かす. 培風館.
- 林知代 (2008). 器質的特性をもつひきこもり者への間主観的アプローチ：アスペルガー症候群と診断された青年との心理面接過程. 心理臨床学研究, **25**, 659-670.
- 広沢正孝 (2010). 成人の高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群：社会に生きる彼らの精神行動特性. 医学書院.
- 広沢正孝 (2015). 学生相談室からみた「こころの構造」：〈格子型/放射型人間〉と 21 世紀の精神病理. 岩崎学術出版社.
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology*. New York: Dover Publications.
- 金川智恵 (2005). 「わたし」のなかの他者：自己意識の形成に及ぼす「他者性」の重要性について. 梶田勲一 (編) (2005). 自己意識研究の現在 2. ナカニシヤ出版, pp.203-226.
- 神庭靖子・神庭重信 (1989). 訳者付記. D.N.スターン (著) 小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳) 神庭靖子・神庭重信 (訳). 乳児の対人世界：理論編. 岩崎学術出版社, pp. 233-236.
- 川上華代 (2013). 現代学生の特徴と学生相談についての一考察：問題や症状が維持され、変わらない学生の姿から見えてくるもの. 和光大学現代人間学部紀要, **6**, 141-153.
- Legrand, D., & Ruby, P. (2009). What Is Self-Specific? Theoretical Investigation and Critical Review of Neuroimaging Results. *Psychological Review*, **116**, 252-282.
- Lyons, V., & Fitzgerald, M. (2013). Atypical Sense of Self in Autism Spectrum Disorders: A Neuro-Cognitive Perspective. Fitzgerald, M (Ed.). *Recent Advances in Autism Spectrum Disorders - Volume I*. Rijeka: InTech, pp. 749-770.
- 前田貴記 (2016). 自己意識の神経心理学の試み. 高次脳機能研究, **36**, 420-425.
- 前川美行 (2011). “自分の実感”と身体性：自我体験と身体的自己感. 東洋英和女学院大学心理相談室紀要, **15**, 64-73.
- Mahler, M. (1975). *The Psychological Birth of the Human Infant*. New York: Basic Books. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理学的誕生：母子共生と個体化. 黎明書房.
- 松井尚子 (2006). スターンとワロンにみる乳幼児の他者体験と「自己」の形成：日常的なエピソードを通して. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, **98**, 237-250.
- 松本拓真 (2015). 自閉症スペクトラム障害の子どもの受身性が固定化する一機序：親子の相互作用と親にもたらす苦悩. 発達心理学研究, **26**, 186-196.
- 松岡利規 (2015). 青年期の自己感に関する研究：自己感尺度の開発と TAT からみた自己感の様相. 平成 26 年度京都大学教育学部卒業論文 (未公開).
- 森さち子 (1996). 自閉的な子どもとの治療のかかわり (その 1)：自己感の発達をともし、象徴的表現が芽生えるまで. 精神分析研究, **40**, 463-492.
- 森さち子 (1998). 自閉的な子どもとの治療のかかわり (その 2)：新たな心的機能と対象関係の出現. 精神分析研究, **42**, 573-585.

- Mori, S. (2001). The role of the self-object experience in the therapy of an autistic child: from lying flat to launching a 'spaceship'. *Journal of child psychotherapy*, **27**, 159-173.
- 森さち子 (2009). 乳幼児研究の関係性理論への貢献. 精神分析研究, **53**, 170-178.
- 奥山眞紀子 (2006). 虐待が子どもにもたらす影響. 児童心理, No.837, 35-41.
- 小笠原かをる・増田樹郎 (2016). 身体表現の可能性：インクルーシブ・フィールドの実践を通して. 障害者教育・福祉学研究, **12**, 19-27.
- 大野裕 (1995). 自分自身と、そして対象との出会いを助けるための治療関係：情緒的な自己感による交流が可能になるまで. 精神分析研究, **39**, 118-126.
- 大須賀隆子 (2008). 「自由保育」に活かす「I as We, We as Iとしての自己感」を育てる「情動調律」：幼・小移行期におけるその意義と役割. 湘徳短期大学研究紀要, **47**, 35-61.
- 大藪泰 (2016). メンタライジングの起源：自己感・他者感とそれを育むもの. 乳幼児医学・心理学研究, **25**, 99-109.
- 佐藤徳 (2011). 何が自己を自己たらしめるか？：運動主体感の研究から. 認知科学, **18**, 29-40.
- 佐藤由宇・櫻井未央 (2010). 広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相. 発達心理学研究, **21**, 147-157.
- Stern, D. N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. New York: Basic Books.
- Stern, D. N. (2000). *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology; First Paperback Edition*. New York: Basic Books.
- Stern, D. N. (2010). *Forms of Vitality: Exploring Dynamic Experience in Psychology, the Arts, Psychotherapy, and Development*. New York: Oxford University Press.
- Synofzik, M., Vosgerau, G., & Newen, A. (2008). Beyond the comparator model: A multifactorial two-step account of agency. *Consciousness and Cognition*, **17**, 219-239.
- 高石恭子 (2009). 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援. 京都大学高等教育研究, **15**, 79-88.
- 田中友香理 (2016). 乳児期の運動主体感の発達過程とその社会的機能. 京都大学教育学研究科紀要, **62**, 15-27.
- Wolpert, D. M. (1997). Computational approaches to motor control. *Trends in cognitive psychology*, **1**, 209-216.
- 山崎徳子 (2015). 自閉症のある子どもの関係発達：「育てる-育てられる」という枠組みでの自己感の形成. ミネルヴァ書房.
- Zhao, W., Luo, L., Li, Q. & Kendrick, K. M. (2013). What can psychiatric disorders tell us about neural processing of the self? *Frontiers in Human Neuroscience*, **7**, Article 485.

(心理臨床学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2018年8月29日, 受理2018年10月29日)

松岡：「自己」の感覚はいかにして生ずるか？

「自己」の感覚はいかにして生ずるか？

—自己感をめぐる心理学的研究の概観と展望—

松岡 利規

人は日常的な体験を主観的に組織化し加工していくことで、その都度「自己」というまとまりを生み出していくが、こうした組織化の主体は自己感 (sense of self) と呼ばれる。自己感の理論的体系化を初めて試みたのは Stern (1985) であり、その実証にあたっては「被観察乳児 observed infant」(発達心理学の研究において乳幼児の行動観察から見出された知見) と「臨床乳児 clinical infant」(精神分析の発達理論に基づき遡及的に導出された知見) の統合が目指されていた。本稿では、Stern の理論に基づいて、被観察乳児・臨床乳児それぞれの立場から近年の自己感研究の発展を概観した。また、自己感の非定型な状態像として統合失調症と発達障害の2つを挙げ、その特異な体験についても取り上げた。被観察乳児・臨床乳児いずれの領域においても、自己感は今なお重要なテーマとして注目されており、現代の臨床実践における「自己」の問題を考える上でも有益な示唆を与えてくれるものであることがわかった。

How Do We Feel the “Self”? Overview of and Perspectives on Psychological Research on the Sense of Self

MATSUOKA Toshiki

People organize and process everyday experiences subjectively. Each time this occurs, the construct of “self” is created. The subject of such organization is called “the sense of self.” Stern (1985) was the first theorist to attempt theoretical systematization of the sense of self, to which he integrated the concepts of “observed infant” (knowledge found in infant observation in the study of developmental psychology) and “clinical infant” (knowledge derived retrospectively based on the developmental theory of psychoanalysis) to verify his theory. Based on Stern’s theory, this article reviews recent developments in research on the sense of self from the standpoint of observed infant and clinical infant. In addition, the atypical sense of self generated by schizophrenia and developmental disorder is also discussed. In studies on both observed infant and clinical infant, the sense of self continues to be an important research subject and it provides useful suggestions for understanding the problem of “self” in modern clinical practice.

キーワード：自己感，被観察乳児，臨床乳児，自己主体感

Keywords: Sense of self, Observed infant, Clinical infant, Sense of agency